



# 読売俳壇

## 矢島 渚男 選

麗かに富士大菩薩甲武信岳

上尾市 山田 正雄

【評】よく晴れて暖かい。富士山、大菩薩嶺、甲武信岳が聳え、気持ちも大らかになる。古来、名詞の多い句が上乘とされたのがよく分かるような句。調べもよい。

先読んでサヨリの群れへ投網打つ

泉佐野市 布野 寿

【評】針魚とも書かれるサヨリは集団で泳ぐから急に方向転換するのが難しい。心得た漁師はその少し先へ網を投げる。刺身に春を感じる魚。鰯を焼く泳ぐ姿を知らぬまま

東京都 山田真理子

【評】ブリは年末から寒中が旬で、旨くて安い。今日はそれを焼いている。でも、これが広い海を泳いでいるところを見たことがない。心なき身もて修する西行忌

八王子市 徳永 松雄

芹摘みし夫婦向き合ふ夕餉かな

相模原市 はやし 央

磯遊び見守る人や靴持つて

神奈川県 石原美枝子

二つ手で孫の供えた彼岸餅

宇都宮市 松広 訓

惚けても夫居る家あたたかし

枚方市 佐藤 紘子

卒業す兔に言葉惜しみなく

横浜市 奥沢 和子

ままごの子の絨毯や犬ふぐり

千葉市 鶴岡十詩生

## 宇多喜代子 選

山道の行手手に落椿

四万十市 左山 遼

【評】椿の木の多い山道を歩いている。そこに落椿が目立つ。「行手手」というやや大袈裟な表現が落椿の多いことを言い当てている。椿の紅色が目につく。

古雛や年追う度に艶やかに

南足柄市 柏木 茂

【評】「年追う度に」古びてくるのが本来であるのに、この古雛は「艶やか」になってゆく。年を経た雛ならではの艶である。黄水仙寂しき人にはほえめり

上田市 小山 渥子

【評】「寂しき人」がいろんな人を想像させる。黄水仙がその「人」にほえんでいるという擬人化。黄水仙の黄が鮮やかである。お絵かきにおおきなまえ草青む

酒田市 兵田 一子

まず仏間妻のこだわる豊替

多摩市 飯島 博幸

春寒や新聞受を抜ける風

周南市 篠原 淳一

種おろすそつと左右の足換へて

行田市 永沼規美雄

ゆつくりと歩けば見ゆる名草の芽

泉佐野市 向井克之介

初蝶や哀しきことは透けて見ゆ

三田市 川原 重子

ものの芽と交はず挨拶散歩道

上尾市 中野 博夫

## 正木ゆう子 選

これでまた田の膨れくる春の雨

千葉市 中村 重雄

【評】田がふっくらとしてくるのだらうか。「膨れくる」が五感に訴えて、田の土とはそういうものかと、教えられる思い。雨の度に、という意味の上五が、さらっと上手い。何世代の命の音で種袋

仙台市 三井 英二

【評】春に時く種は、去年の収穫時に採ったもの。一年に一代。作物もそうして命を繋いできた。普通は人に使う世代という言葉が、新鮮。ISS仰ぐ絆纏重ね着す

埼玉県 矢内とき子

【評】科学の最先端である国際宇宙ステーションを仰ぐのに、古めかしい絆纏というのがいい。時代が変わっても、夜空を仰ぐ人の気持ちは同じ。チョークかす浴びる教壇ヒヤシンス

倉敷市 谷吉 修一

米作りだけの人生種浸す

秋田県 池田郷太郎

「さ」をクリックすれば君の名春の雨

八幡市 会田重太郎

春早しびわ湖全層循環す

大津市 竹村 哲男

馬洗ひの名残の池や水ぬるむ

旭市 斉藤 功

対岸はコンビニートや潮干潟

鈴鹿市 岩口 巳年

背の高き女子には生まれ卒業歌

宮崎市 野中 一則

## 小澤 實 選

草の芽はや畦なる鳥の糞からも

羽曳野市 鎌田 武

【評】田畑の畦に落とされた鳥の糞の形が崩れないうちに、そこから草の芽が早くも出てくる。春の草の芽の勢いをたしかに捉えた。田畑の雑草取りのたいへんさまで思わせる。末黒野となりて見えたるけもの道

東京都 望月 清彦

【評】末黒野は野焼を終えた野。そこに獣が通い踏み固めた道が現れた。草木があつては見えなかった道が、見えてきたところに驚く。鶏合果てて鶏冠の掃かれをり

名古屋市 可知 豊親

【評】鶏合の激しい闘いで、鶏冠が蹴り落とされてしまっているのだ。闘いが終わって、それが片付けられている。静寂が激闘を際立てる。焼きたてのパンとコーヒー春一番

松山市 久保 菜

着ぶくれのチャックいじくじ衣かむ

掛川市 赤堀のぼる

自転車を押して歩くや春の川

京都市 吉田 基子

映画館出て古書肆へと遅日かな

武蔵野市 相坂 康

春浅し鉄鍋の尻磨きをり

さいたま市 薄井 逸走

いま一度逆上がりして卒業す

川越市 大野宥之介

夢の中で夢をみてゐる春の雪

秩父市 中島由美子